

戦争する国、平和する国

ノーベル平和賞受賞者 現コスタリカ大統領
オスカル・アリアス・サンチェス氏と語る

小出五郎著(佼成出版社・1470円)

朝日新聞 07(H19).11.4

「平和は平和的手段でのみ達成できるのです。平和的手段とは、対話、理解、寛容、自由、そして民主主義です。……中米の将来は中米の手にまかせて欲しい。……もし、自国の事情で武器の在庫を空にしなくてはならない場合であっても、少なくとも中米には関わらずに平和な状態において欲しい……」

コスタリカのオスカル・アリアス・サンチェス大統領の一九八七年ノーベル平和賞受賞記念演説の一部である。ここに本書のすべてがある。

したたかな平和と教育の国作り

植物や薬の
作り、有用
開発による

中米と言えば、米ソの冷戦に振り回された政情不安定な地域という印象が強い。しかし、コスタリカは例外なのだ。一九四九年、大統領選挙の不正に端を発した革命のリーダーであったホセ・フィレীগスが、内戦終了と共に革命軍の全廃を宣言し、最重要事項として教育をあげたのである。実際に非武装を掲げた憲法を制定し、今も教育に国家予算の二〇％を投じている。本書は、この流れをより強力にしたアリアス大統領へのインタビューをもとに書かれたものである。

著者が、「平和する」という言葉で表現しているように、平和であるためには戦略が必要である。この国には、平和という旗じるしと国際環境、国内環境を自国に有利な方向に導く具体策と実行とがある。国際環境の方は、米州機構(アメリカ大陸の相互援助と集団的安全保障を定めた国際組織)と国連を活用する。実際に、一九四八年と五年に起きた隣国ニカラグアとの間の紛争は、米州機構での話し合いで解決している。米国の強い影響下にあり、その機嫌を損ねてはいけないことを充分承知し、親米政策をとりながら、冒頭にあげた演説をやったのけるしたたかさ。「その道は、もしかしたら戦争するよりも険しく、継続的な忍耐と努力が必要だ。生易しいことではない」。しかしやり甲斐のある努力だと思ふ。

世界的バイオテクノロジー事情に詳しい著者は、これが国民全体を豊かにせず、貧富の差を生む危険性を心配するが、アリアス氏は即効性を求めず、とにかく教育から始めれば大丈夫とどっしり構えている。

国内戦略はまず教育。訪れた中学校は、トタン屋根の粗末な建屋だったそうだが、大事な内容は内容だ。平和教育と言ってもとりたてて戦争の悲惨さを語るのではなく、あらゆる場面で、人間を大切にすることを根づかせ、平和文化の構築という方法をとる。それを支えるのが、「子どもの権利条約」と「国連平和大学」だと著者は分析する。ここで興味深かったのは、十七歳以下の子どもが投票日に投票するという話だ。選挙権はないので実効性はないが結果は公表される。大人と違う結果が出たこともあるそうだ。

ところで、コスタリカで忘れてならないのは、生物多様性である。コーヒー、バナナ、牛肉の生産のために破壊された多様性を守るために、「保全する」戦略が立てられ、これを「平和する」の基本に置いたのである。平和であるには経済力も重要、そこで地元民を巻きこみ「環境と観光の共生」をめざすエコツアーを始めた。また、研究所を作り、有用植物や薬の開発による知的所有権で豊かになることを狙っている。生物多様性立国である。

そして、若者へのメッセージを求められ、「腐敗のなかで最悪なのは、人々が聞きたがっていることを言うだけで、知る必要のあることを言わないことです」と若い頃共感した故ケネディ大統領の言葉をあげた。こんなリーダーが欲しいと思う。